

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University merge to Osaka Metropolitan University

<b>Title</b>	先端的都市研究ブックレットシリーズの刊行に寄せて / はじめに / 目次
<b>Author</b>	阿部 昌樹, 川崎 修良
<b>Citation</b>	URP「先端的都市研究」シリーズ. 24 巻
<b>Published</b>	2021-03-15
<b>ISBN</b>	978-4-904010-39-6
<b>Type</b>	Others
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学都市研究プラザ
<b>Description</b>	創造都市における文化プロジェクトと担い手育成：フランス・ナント市と京都市を例に
<b>DOI</b>	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

URP 先端的都市研究シリーズ 24

**創造都市における文化プロジェクトと  
担い手育成**  
フランス・ナント市と京都市を例に

川崎 修良・越智 郁乃 編



## 先端的都市研究ブックレットシリーズの刊行に寄せて

本シリーズは、大阪市立大学都市研究プラザを拠点として取り組まれてきた先端的都市研究の成果や、それを踏まえた教育実践の成果を、多くの人々に共有していただくことを目的として刊行するものである。

都市研究プラザは、大阪市立大学が創設以来蓄積してきた「都市研究」の実績をもとに、2006年4月に開設された。「プラザ」という名称を付したのは、研究者だけではなく、都市において様々なまちづくりの実践に取り組む人々もそこに集い、相互に刺激を与え合い、新たなアイデアを産み出すことができるような「広場」としての役割を果たしていきたいと考えてのことであった。

その後、2007年度には、文部科学省が、我が国の大学の教育研究機能の一層の充実・強化を図り、世界最高水準の研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援し、もって、国際競争力ある大学づくりを推進することを目的として創設した、グローバル COE プログラムの拠点のひとつに選ばれた。そして、2007年度から2011年度までの5年間、文部科学省の財政的支援の下に、「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」をテーマとする研究拠点形成推進事業に取り組んだ。その成果を受け継いでさらに、2014年度には、文部科学大臣より「共同利用・共同研究拠点」としての認定を受けた。現在は、この認定を踏まえて、「先端的都市研究拠点」という名称を掲げ、全国の関連研究者のコミュニティが都市研究プラザを拠点として、大阪市立大学がこれまで蓄積してきた都市研究の知的リソースや人的・組織的ネットワークを活用し、最先端の都市研究に取り組んでいただけるよう、そのための基盤整備に努めているところである。

その一方で、研究者とまちづくりの実践に取り組む人々がともに集うことができる「広場」でありたいという都市研究プラザ創設の理念もまた、この間一貫して維持されてきた。この理念に基づく研究者とまちづくりの実践者との協働は、大阪市立大学のキャンパスにおいてのみならず、「現場プラザ」と名付けられたサテライト施設においても多彩に展開され、様々な成果を挙げている。また、ソウル、台北、香港、バンコク、ジョクジャカルタ等の海外の諸都市に設

立した海外センターや海外オフィスを拠点として、それらの諸都市を基盤として活動する研究者やNPO等との協働にも取り組んでいる。

社会に開かれた「広場」において、まちづくりの実践から学び、その成果をまちづくりの実践へと還元していくような研究を継続していくことこそが、大阪市立大学都市研究プラザが目指すところである。本シリーズの刊行も、そうした目的を実現するための取り組みのひとつである。本シリーズが、大阪のみならず全国各地において、まちづくりの実践に活かしていただけたならば、これに優る喜びはない。

大阪市立大学都市研究プラザ所長

阿部 昌樹

## はじめに

本冊子は、大阪市立大学先端的都市研究拠点共同利用事業・共同研究助成「創造的都市再生の試みにおける学生の包摂手法の研究：京都における芸術文化の創造性を活かした市民主導のまちづくりプロジェクトを題材に」（代表者：川崎修良）に関する研究の成果である。研究では、創造都市の重要な要素である芸術文化の創造性を活かした都市再生に向けて、その取り組みに学生が参画する事例を基に検証した。

創造都市は文化芸術と産業経済との創造性に富んだ都市の総称であり、その実現に向けて都市の様々な利害関係者の活動に創造性の文化を組み込むことが提唱された考えでもある。このような意味での創造都市を実現するには「文化芸術振興」「産業振興」「まちづくり・都市デザイン」などの分野をまたがる都市政策が必要であり、都市環境の整備だけではなく市民の考え方、彼らが機会と問題にどのように取り組むかが重要となる。学生の包摂に目を向けたのは、都市創造に向けたプロジェクトを通して新たな職能が発生し、その職能者が育つ視点に注目したからである。

それらを考察するための一つの事例として、フランス国ナント市が挙げられる。ナントは衰退した造船工業都市から文化芸術都市へのイメージ転換に成功した事例として知られる。日本では、ナント市における都市空間を活用した文化イベントや、産業遺構を活用した文化施設に着目されることが多いが、公共空間の創造的再生を意図して、舞台美術の技術であるセノグラフィ（仏語：scénographie）を都市に展開している点にはあまり言及されていない。舞台技術の視点を都市空間に応用する「都市のセノグラフィ」は国立建築大学においても公教育として成立し、都市空間を舞台とした文化プロジェクトを行うアクターを育て、活用する技法が洗練されつつある。

翻って日本では、都市に関わる市民活動の成熟については「まちづくり」の分野が当てられることが一般的であろう。まちづくりの用語が政策化する過程とその対象となる意味内容の変遷には注意する必要があるが、少なくともこれまで「文化芸術振興」と「まちづくり」の政策分野横断が十分に行われてきたとは考えにくい。例えば国土交通省が2017年に作成した「『ま

ちづくりの担い手のあり方検討会』の取りまとめ」においては、民間まちづくり活動を推進する上で「人材」が最も重要と位置付けた上で、「まちづくり活動には、経営、広報、建築・不動産、財務会計、法務、税務等の幅広い職能が必要とされる」とする。列挙された職能から創造性を読み取ることは難しい。これまで行政職が担ってきた職能のアウトソーシング的な捉え方が行われてきたのが実情と思われる。

一方、2017年に成立した「文化芸術基本法」では、文化芸術に関する施策の推進にまちづくりを含めた様々な関連分野における施策との有機的な連携が図られるよう配慮するとされた。これは重要な変化である。既存の都市を前提としたまちづくりの定形化の議論が進められつつも、文化芸術の視点からもその意義が問われ始めているのが、今の日本の政策的な視点といえるだろう。

以上を踏まえて本研究では、個別都市や市民主導のまちづくりの事例から創造都市の担い手を育む取り組みを見出し、政策と市民双方が刺激を受けながら都市像を描けるような都市再生の手法を提起したいと考えた。具体的には、大都市の中でも学生の割合が高く早くから学生と地域を連携させたまちづくりの施策にも取り組んでいる京都市を対象に、芸術文化の創造性と都市再生の試みを結びつけた市民プロジェクトにおいて学生を包摂するプロセスとその意義の検証を行った。そしてその検証をもとに京都とナントの事例を比較しながら、創造都市の担い手育成に向けた議論を行うためにシンポジウムを開催した。

本冊子第一部には、2020年9月に京都とフランス・ナントをオンラインでつないだシンポジウム「文化プロジェクトと都市計画」の概要と、そこで行われたナントと京都の研究者・実践者の基調講演の一部を採録した。続く第二部には、シンポジウムでの議論や調査を基に論考を執筆した。創造都市の担い手育成の視点を持った、日本におけるまちづくりの新たな職能創出に向けて、本研究が一助になることを願う次第である。

川崎 修良

# 目次

はじめに 川崎修良

## 第一部 シンポジウム記録集

第1章 シンポジウム「文化プロジェクトと都市計画～京都の試みとフランス・ナント市の「過渡期の都市計画」の対話を通じた芸術祭の役割とその展望～」の概要

川崎修良 1

第2章 シンポジウム「文化プロジェクトと都市計画」基調講演①：  
ナントの文化的・都市計画的アイデンティティとなったセノグラフィ

Emmanuelle Gangloff（訳：高田裕輔） 5

第3章 シンポジウム「文化プロジェクトと都市計画」基調講演②：  
ナントのアートプロジェクトについての日本からの視座

川崎修良 17

## 第二部 論考

第4章 文化芸術による都市政策から公教育へ：  
フランス・ナント市における都市のセノグラフィ教育の実践

川崎修良 27

第5章 日本のまちづくり活動における担い手と学生の関係：  
京都における市民プロジェクトを題材に

川崎修良・越智郁乃 51

おわりに 川崎修良・越智郁乃 69